

○帰り道・練馬駅(夕)

混み合っているホーム。

列の一番前で電車を待っている高梨悠哉(16)。

悠哉(ナレーション)「俺の名前は高梨悠哉。練馬高校にかよう平凡な高校生だ。勉強も人並みにこなし、運動も人並みに出来る。恋だつて人並みに……」

悠哉、きよろきよろしている。

悠哉「はあ、今日もない。時間変わったのかな」

混み合う人ごみの中に、アテナ(16)の姿が、一瞬見える。

駅員「ホームに電車が参ります。黄色い線の内側まで、お下がりにください」

悠哉の後ろの客が押し合う。

乗客A「うわっちよっおすなよ！」

乗客B「きゃっ！」

悠哉の背中が押される。

その弾みでホームから落ちる。

悠哉「えっ？」

電車は、すぐそこまで近づいてきている。

景色がスローモーションになる。

悠哉(ナレ)「嘘、死ぬの？ 神様、ごめんなさい！ まだ人並みの恋もしてないんです！ 告白もしてないし、名前すら聞いてない！ 嫌だ、嫌だ」

○練馬病院・病室

ベッドから飛び起きる悠哉。

目の前には、アテナがいる。

悠哉「ぜったいいやだあああああ！」

アテナ「きゃ！ 何事？」

悠哉「え？ す、すみません！」

アテナ「びっくりさせないでよう！」

悠哉「あれ？ ていうか、俺生きてる？」

アテナ「しーたっ！ 下見て、下」

悠哉「下？」

見ると下には、たくさんの救命装置に

【脚本】 晴れのち天使。

梶本 さゆり

登場人物

高梨悠哉(16) 高校生

アテナ(16) 謎の天使

幽霊A・B・C

つながれた悠哉の体が寝ている。

悠哉「な、なんで俺が？ いや、でも俺はここに……え、浮いてる！」

アテナ「ちよっと、落ち着いてよ。幽体離脱ぐらい知ってるでしょ？ 本当のあなたは下で瀕死状態なの」

悠哉「何言ってる……ていうか、君誰？」

アテナ「よくぞ聞いてくれました！ 私は美少女天使見習いのアテナ！ 高梨悠哉君、あなたの魂を迎えに来たの」

悠哉「天使？ じゃあ俺、死ぬの？ 嘘だろ？」

アテナ「落ち込むのは分かるけど、でも」

悠哉「いやだ、俺はまだ死にたくない！

あの子に告白するまでっ死ぬないよ！」

アテナ「告白？」

悠哉「好きな子、いるんだよ」

アテナ「そう……」

悠哉「なのに、なんでそんな……この年で死ぬとか、マジなんなんだよ……」

泣き崩れる悠哉。

アテナ、そっと肩に触れる。

アテナ「わかった。私だっけ鬼じゃない、天使よ。あなたが死ぬまで、もう少し時間があるわ。それまでに、その子に告白しまし
よう！」

悠哉「え？」

アテナ「ね？ 私も手伝うから！」

アテナ、がっしりと悠哉の肩をつかみ、前後に振りまくる。

悠哉「でも、俺その子の名前も家も何も知らないんだ。どこに行けば会えるかも」

アテナ「チツチツチ！ 私を甘く見ない事

ね！ 私はね、昔から自分の目的の達成の為に手段を選ばないことで有名なの！」

目を輝かせて言い切るアテナ。

呆気にとられる悠哉。

悠哉「自称天使の癖に、なんて腹黒い……」

アテナ「ん？ 何かおっしゃって？」

悠哉「いえ、なんでもありません……」

アテナ「こんなことしてる時間すら惜しいわね！ そうと決まれば早速行動開始よ！

どんな時も、諦めず、自分の気持ちに正直に、ひたすら前に突っ走る！ これ、私の座右の銘なの。どう、かっこいいでしょ！」

悠哉「はあ……」

アテナ「そうね、手始めにまず、その子の特徴教えて頂戴！ こう、パパッと。」

悠哉「えっと、いつも駅で会う子で……行きも帰りもよく同じ電車に乗ってて、最初は良く会うなーと思ってたんだけど、気がついたら好きになっただけ」

アテナ「え？」

悠哉「いや、でもこれがマジ本当に可愛い子なんだよ。いつも電車で本読んでてさ。ふわふわのお花みたいで、おしとやかさそうで、優しそうで、制服もきちっと着てて。守ってあげたくなるような、本当に、可愛い子なんだよ」

悠哉、うつとりしている。

アテナ、どんよりした目でそんな悠哉を見ている。

悠哉「えっと、アテナさん？」

アテナ「なんでもない！ つてか、さん付けはやめて！ 柄じゃないわ」

悠哉「はあ……じゃあ、アテナ？」

赤面するアテナ。

悠哉「顔真っ赤だけど、大丈夫？」

アテナ「……殺す」

アテナ、手首をバキバキならす。

悠哉「な、天使が殺すとか言うなよ、怖いな！ 全国の少年少女の夢を壊すな！」

アテナ「うるさい！ いいから、何か手がかりないの？ ねえ！」

と、悠哉を殴りまくる。

悠哉「死ぬ死ぬ！ 死んでるけど、死ぬ！」

悠哉、不意に天井を見つめ叫ぶ。

悠哉「あ。あああああああああ！」

アテナ「な、何よ？」

悠哉「制服だよ！ あの子と同じ制服の子を

探せば学校が分かる。そうすれば、何か分かるかもしれない！」

アテナ「そ、そうね。」

悠哉「やっぱ諦めちゃダメだよな！ 希望がわいてきた！ 俺頑張るよ！」

アテナ「う、うん」

と、不安そうな顔をする。

○学校・校門前

校門前に立つ悠哉とアテナ。

周りは通学途中の生徒だらけだが、当然2人の姿は見えていない。

生徒は皆、お嬢様風な女子ばかりである。

悠哉「俺の推理は正しかったああああ！」

アテナ「うるさい！ 周りには聞こえなくても私には聞こえるんだから、静かにしてよね！」

悠哉「ここが、あの子の通う学校なんだ」

アテナ「で？ あんたはここに、潜入しようというのね？」

悠哉「もちろん！ ここにあの子の手がかりがあるはずなんだ！」

アテナ「ここに、ねえ」

ニヤリと笑うアテナ。

アテナ「悠哉君は、女子高に潜入するんだ」

悠哉「あ」

アテナ「やーらーしいー」

一瞬で赤面し、首がもげるほど振りまくる悠哉。

悠哉「な、なー！ ち、違う、俺はそんなつもりじゃ！」

アテナ「はいはい、わかってるわよ。ジョーダンよ、冗談。さっさと行きましょ」

悠哉、アテナに引きずられ校内へ入る。

悠哉「違うんだあああ……」

○同・バラ園付近

校内を歩き回る悠哉。

バラ園という看板を見つけ、立ち止ま

る。

悠哉「予想はしてたけど、なんていうか、本当にお嬢様学校って感じだな。俺達、場違いも甚だしくねえかな」

アテナ「達って何よ、達って。こんなの、見かけだけよ」

悠哉「そんなもんなの？」

アテナ「…さあね。それで、これからどうするの？」

悠哉「え、いや、まだ何も」

アテナ「何よそれ、ここに来た意味ないじゃない！」

悠哉、しゃがんで落ち込む。

悠哉「俺って、いつもこうなんだよな……勢いばかりで……」

悠哉の周りの薔薇が枯れる。

アテナ「ちよつと、落ち込まないですよ！ 幽霊が落ち込むと良くないオーラが」

三人の幽霊が、悠哉の周りに集まる。

幽霊A「ねえー、何してるのー」

幽霊B「純白の羽、頭の輪、天使だ！」

幽霊C「俺も天国連れてってよー」

幽霊達「天国行きたいー！」

アテナ「ほら、変なまで呼んじゃったじゃない！」

と、悠哉を揺する。

アテナ「しつかりしてよ。好きなんでしょ？

だったら……私なら、絶対何があったって

諦めないわ！」

悠哉「アテナ……」

アテナ「私にいい考えがある」

○同・職員室前

職員室の前に来る二人。

隅にしゃがんで、会議する。

アテナ「ここ一週間で、急に学校に来なくなった生徒がいれば、その子なんじゃない？」

悠哉「じゃあ、出席名簿を見るって事？」

アテナ「そういうこと」

悠哉「でも、名簿なんかどうやって……」

○同・職員室

堂々とドアをすり抜け職員室に入り、
出席名簿を持ち出すアテナ。
出席名簿の束だけが浮いてるのに教頭
先生が気付く。

教頭「ええ？」

目をこする教頭先生。

先生A「どうしました？ 教頭先生」

教頭「いや……えっと、自分疲れてるみたい
なのでちょっと休んできます……」

悠哉、ドアの隙間から一部始終を覗い
ている。

○同・職員室前

アテナが中から出てくる。

悠哉「お前、相当チャレンジャーだよ」

アテナ「もち、あたぼうよ」

悠哉「天使やめて、泥棒すれば？」

アテナ、悠哉を激しく睨みつけ、出席
名簿を外へ投げようとする。

悠哉「わああ、すいませんアテナ様！ あり
がとうございます！！」

アテナ「フン。よろしい」

悠哉、出席簿をめくりだす。

アテナその間、廊下にある花瓶の花で
遊んでいる。

悠哉、顔を上げアテナを見る。

悠哉「そうしていると、天使っぽいな」

アテナ「な、そうしてなきゃ天使にみえない
とでも？」

悠哉「何だよ、褒めてんのに。そーいや、あ
の子も花好きだったな。時々、駅でも持つ
てたよ」

アテナ「ふーん……」

悠哉は名簿をめくり続ける。

アテナ「悠哉……あのね」

悠哉「あ、アテナ、ほら、見て！」
と、出席簿をアテナに見せる。

2年1組の名簿の颯々と書かれた欄

が、一週間前から×マークになっ
てい
る。

悠哉「この子、ちょうど一週間前から学校に
来てない。2年1組の、なんて読むんだ？
これ。タチカゼ、ナナ？」

アテナ「……」

悠哉「きつとこの子だ！ アテナ、2年1組
に行けば何か判るかも知れない。行こう！」

アテナ「う、うん……」

走り出す悠哉。

遅れて、走りだすアテナ。

○同・廊下

廊下を走り、2年1組を目指す二人。

何人かの生徒とすれ違うが、もちろん
二人は見えない。

鐘の音が響き渡る。

アテナ、驚く。

アテナ（ナレ）「まだ、ダメ。もう少しだけ待
って。お願い、お願い神様」

悠哉「ここだ！ 2年1組！」

○同・2年1組教室

悠哉、恐る恐る中へ入り、あたりを見
渡す。

アテナ、俯きながらそれに続く。

悠哉「……いない」

アテナ「悠哉、私……」

悠哉「これ……」

悠哉の目の前の机の真ん中に、花瓶に
入った花が飾ってある。

悠哉「まさか、これって」

すると、ちょうど生徒が花瓶の水を入
れ替えるに教室を出て行く。

それを見た生徒がつぶやく。

生徒A「もう、一週間たつのね。」

生徒B「そうね。」

生徒A「まだ、私信じられないわ……奈々が、
死んだなんて」

と、移動教室へと去っていく生徒たち。

悠哉「……死んだ？」

アテナ「ごめんなさい！ 黙ってて……」

悠哉「アテナ……知ってたの？」

アテナ「ごめんなさい……」

悠哉「そんな……」

花瓶の置いてある机をそっとさわわり、

ガクッと崩れ落ちる悠哉。

ふと、机の端に彫ってある「HAY A

TENNANA」の文字を見つける。

悠哉「はやてなな、さんって言うのか。名前

すら、伝えてないのに。なんで……」

悠哉、愛しそうに何度も文字をつぶや

く。

悠哉「はやて、なな……ん？」

机の文字を指でなぞる悠哉。

悠哉「ATENN A？」

アテナ「……はい」

ゆっくり振り返る悠哉。

悠哉「君？」

アテナ「黙ってて、ごめんなさい」

泣き出すアテナ。

悠哉「え？」

アテナ「私、私が、奈々なの。颯、奈々……

嘘ついて、ごめん。」

悠哉、ポカンと口あける。

アテナ「騙すつもりなんて、無かったんだけ

ど……あなたが私をすきって知って、でも

あなたが憧れてた私と、現実の私とのギャ

ップがあまりにも激しくて、言ったら嫌わ

れるんじゃないかと思って……」

悠哉「そりゃ、凄いいメージ違うけど……」

アテナ「私だって駅で、いつも見えて！ 最

初は私も、よく会うなって思ってた……で

も、気づいたらあなたのことばかり考えて

た！ それで、一週間前のあの日、やっと

告白しようって決心して、駅前で待ち伏せ

してたの。そしたら……酔っ払いの車が突

っ込んできて、私、そのまま……」

悠哉「なんで死んだはずの君が、その、天使

に？」

アテナ「それは、あんたと一緒よ！ 告白も

せずに死ぬるか！ 人生で一度も、恋愛を

せずにしねるか！ って迎えにきた天使を

脅したのよ。一週間でいいから、時間をよ

こせ、って。そしたら、大人しく天国行っ

てやるからって」

悠哉「ってお前、天使を脅したのか？」

アテナ「だって、ヘチヨそうな優男で、押し

たら落ちそうだったんだもん。」

悠哉「ハハ……バ、バツカじゃねえの！」

悠哉、腹を抱えて笑い出す。

アテナ「わっわわ笑い事じゃないわよ！

やっこの思いでアンタの元に辿り着いたは

いいものの、あんた全く気づきやしないん

だもの！ それで思いついたのよ。だった

ら、相手も同じ霊体にすればいいって。そ

れで……」

いいにくそうにするアテナ。

悠哉「それで？」

アテナ「それで、背中を、こう、ドンって」

悠哉「な、お前が俺を殺したのか？」

アテナ「大丈夫、みね打ちよ」

悠哉「電車事故にみね打ちなんかあるか！」

アテナ「私だって必死だったのよ！ 初めて

好きになったんだもの。どんな手を使って

も会いたかったの！」

真面目な顔になるアテナ。

悠哉「もう、何がなんだか……」

悠哉、アテナの手をとる。

悠哉「でも、君の気持ちは分かった。だから、

改めて、告白してもいい？」

アテナ「……嫌だ」

ずっこける悠哉。

悠哉「な、なんで？！」

アテナ「だって、私あなたの理想の女の子な

んかじゃないもん……」

悠哉「そんなこと！」

アテナ「私がずっと読んでた本が、水戸黄門

シリーズ全巻でも？」

悠哉「え、そうなの？びっくりしたけどいい

じゃん、渋くて。」

アテナ「制服だって学校の規則が厳しいだけだし！ いつも先生にも、もっとおしとやかにって起こられるし」

悠哉「でも、花が好きなのは、女の子らしいじゃん」

アテナ「と、とにかく！ 本当の私は、あなたの好きな女の子と全然違うのよ！」

アテナ、いてもたってもいられず、床に座り込む。

悠哉、しゃがんでアテナに視線をあわす。

悠哉「ねえアテナ、俺、ずっと駅で見てる女の子が大好きだったんだ。どんな声で話すんだろう、どんな顔で笑うんだろうっていうも考えてた。きっと、天使みたいなんだろうなって。俺は今、心の底から、俺のずっと好きだった子が、アテナでよかったって思ってる。それでも、だめ？」

アテナ「だめ……じゃない。」

悠哉はアテナにそっとキスをする。

すると、アテナの体が光出す。

悠哉「え？ どうしたのアテナ」

アテナ「ごめん、悠哉。私、もう一つ嘘ついてた」

悠哉「何？」

アテナ「タイムリミットがあるのは、悠哉じゃなくて、私なの。今日で私が死んでから、ちょうど一週間なの」

悠哉「そんな、何でそんな嘘を」

アテナ「あの時は好きな相手が自分だなんて思わなかったから。どうせ相手には見えななんだし、早々に振られて、私の物になれればいいと思ってたんだ。大丈夫だよ。悠哉はあと数日もすれば目が覚めるわ」

悠哉（ナレ）「ど、どこまで腹黒いんだこいつ……」

アテナ、振り返ってにっこりと笑う。

アテナ「ね、私とんでもない女でしょ？ だから、こんなやつのこと忘れて、新しい恋、

探しなよ！」

悠哉「ま、待てよ！」

消えかかったアテナの腕をつかむ。

悠哉「いかなる時も諦めず、己の気持ちに正直に、ひたすら前に突っ走る！ そう言っ
たよな？ だったら、諦めんなよ！」

アテナ「悠哉……」

悠哉「俺も、そっちに行くよ！」

アテナ「え？」

悠哉「一緒に、天国に行こう！」

アテナ「ちよ、それが、どういう意味か分かってるの？」

悠哉「一緒にいたいんだ！ 大好きなんだ！

この命かけても、アテナの側にいたいんだ！」

アテナ「ねえ、目、つぶって。」

もう一度、アテナからキスをする。

アテナ「私も、だいすき。大丈夫、私、まだ諦めないから……」

アテナは耳元でささやいて、光の中へ消えていく。

悠哉（ナレ）「そういつて俺の目の前から消えていったアテナの姿は、本当に綺麗で。天使そのものだった」

○練馬病院・病室

悠哉、目を覚ます。

母親、泣いて喜ぶ。

医者はその横で首をひねっている。

悠哉（ナレ）「目が覚めると、俺はあの病室のベッドにいた。怪我は酷いものの、命に別状も無く、医者は奇跡だと言っていた。俺だけが、電車に轢かれてこの軽症というのが、奇跡ではない事を知っているのだけど、それを言ったら今度は頭の検査をされるのも分かっていたから、言わなかった。俺は、一ヶ月で退院した」

○練馬駅・ホーム

電車を待つ悠哉の後ろに、三人の幽霊がいる。

幽霊A「ゆうたん、私をここから連れ出してー」

E N D

幽霊B「あのめんこい天使さんはどこいったんじやー。ふられたんかー」

幽霊C「あわせろーあわせろー」

悠哉「うるさい三バカ共！」

悠哉が怒鳴ると、周りの人が変な目で悠哉を見る。

悠哉（ナレ）「あれ以来、俺はすっかり霊が見えるようになってしまった。こいつらはなつかれるし、最悪な後遺症を残してくれたもんだ、あのバカ天使は。まあ、そのおかげで」

悠哉、頭をハリセンで思いっきり叩かれる。

アテナが立っている。

アテナ「誰がバカ天使ですって？」

悠哉「人のモノローグに突っ込みを入れるな！ この腹黒天使！」

アテナ「フン！」

悠哉（ナレ）「あの後、アテナは、本当に諦めず、正式な天使になったらいい。こんなやつが天使だなんて、世も末だと思うけど。まあ、多分、汚い手を使ったんだろうが。

天使相手に脅しとか、恐喝とかな……」

アテナ「悠哉？ 何か言った？」

悠哉「いや？ 何も？」

アテナ「どうせまた、人のこと腹黒だのインチキだの姑息だのって考えてたでしょ！」

悠哉「やっぱり自覚あるんじゃないか！」

アテナ「んまあー！ なんですすってえ？」

アテナさらに大きなハリセンを持って悠哉を追いかける。

悠哉「うわあああ！」

悠哉（ナレ）「こうして、俺は今、それなり

7 楽しい暮らしを送っている。誰よりも愛

する、ちよつとバカでかなり腹黒で、何より愛しい俺の天使と。そして、きっと、これからも」